第２章　佐賀市の現状と課題

◆第１節　佐賀市の概況
◆第２節　文化振興の現状と課題
◆第３節　基礎調査結果からみる文化振興の状況
◆第４節　課題のまとめ

■佐賀県指定天然記念物　佐賀城阯の楠（群）

第１節　佐賀市の概況

（1）位置、地勢、面積

本市は、佐賀県のほぼ中央部に位置し、東は神埼市、西は小城市、北西部では唐津市と接しています。また、北端部では福岡市と接しており、県庁所在地同士が隣接しています。市域の北半分は脊振山地に含まれ、標高の高い地形となっています。これに対し長崎自動車道付近を境にして南部の地域は平野となっています。この平野は佐賀平野と呼ばれる沖積平野です。

平野の中央部を南流するのが、脊振山系に源を発する嘉瀬川です。東部には、九州最大の河川である筑後川が流れ自然環境に恵まれた地域です。

交通は、奈良時代、大宰府から肥前国庁までの「官道」が建設されましたが、その後、まちの繁栄が中部域に移り、佐賀城下町建設と相まって長崎街道が整備されました。また、佐賀は低平地のため、水路網が発達しており、それらを利用した水運が活発になりました。現代の道路網としては、北部山麓を東西に長崎自動車道が走り、平野部を走る国道３４号線も拡張・整備され、広域的道路網が形成されています。そして、熊本・大牟田方面を結ぶ有明海沿岸道路の建設が進められています。これに九州佐賀国際空港やＪＲ佐賀駅が加わり、広域的な移動が可能となっています。

佐賀市の総面積は、４３１.８４平方キロメートルで、南北約３８キロメートル、東西約２２キロメートルの南北に長い市域となっており、佐賀県の面積の約１８パーセントを占めています。県庁所在地ではありますが、農地や山林が多く、また有明海にも面しており、第一次産業が盛んな土地柄となっています。

（2）歴史、沿革

「さが」という地名の由来については、「肥前国風土記」に二つの伝承が記述されています。一つは、日本武尊が今の佐賀を訪れた時、楠が大きく茂っている様子を見て「この国は『栄の国』と呼ぶがよかろう」といったことから、「栄郡」と呼ばれ、後に「佐嘉郡」と呼ぶようになったとするものです。

もう一つは、佐嘉川という川があり、川上に「荒ぶる神」がいて、往来する人の半分は生かし、半分は殺していました。これに困った県主の先祖である大荒田は、占いによって神意を問い、２人の賢女の進言によって、荒ぶる神を和らげました。大荒田はこの２人の賢い女性を讃え、この地域を「賢女郡」と呼ぶようになり、これが訛って「佐嘉郡」と呼ばれるようになったとするものです。

古代、肥前国を統括する役所である「肥前国庁」は、現在の佐賀市大和町に置かれていました。周辺部では、穀物などを保管していた正倉や国司の館跡と想定される大型の掘立柱建物群が発掘調査で確認され、古代官道や国分寺、国分尼寺など、この地が古代の政治・文化の中心であったことを示す遺跡も多数存在しています。

戦国時代には、群雄割拠の時代が続きましたが、その中でも龍造寺氏が有力な戦国大名に成長していきました。１６世紀末、龍造寺隆信の頃、支配地域は最大となり、五州二島の太守と仰がれるようになりましたが、隆信陣没後、重臣の鍋島氏が台頭し、龍造寺氏の居城である村中城を拡張整備して、佐賀城を造営し、佐賀藩３５万７千石の領国経営の拠点としました。

佐賀藩は、幕府の直轄地である長崎を福岡藩と隔年交代で警備していましたが、文化５年（１８０８）のイギリス軍艦フェートン号の長崎港侵入事件や天保１１年（１８４０）のアヘン戦争における清国の敗北により、全国的な海防意識を高めることとなりました。

こうした情勢から、長崎警備の体制を強化するため軍事力の増強が図られ、西洋砲術の導入や、鋳砲事業の推進へとつながりました。以後、佐賀藩の貪欲なまでの西洋科学への傾倒は、反射炉による鉄製大砲の鋳造や精煉方での理化学研究、三重津海軍所での造船･修船などへ発展していきました。これにより、佐賀藩は「薩長土肥」と呼ばれる雄藩となり、日本の近代化に大きく貢献しました。

明治４年（１８７１）に廃藩置県が行われ、佐賀県が設置されました。明治新政府は、欧米諸国を模範とした近代国家づくりをめざしており、佐賀藩出身者も多く参画しました。

明治７年（１８７４）には佐賀の乱（佐賀戦争）が起こりましたが、新政府により鎮圧されました。これを機に佐賀県は消滅し、三潴県（のち長崎県）に統合されてしまいました。その後、佐賀県の復県運動が起こり、明治１６年（１８８３）に長崎県に所属していた１０郡（佐賀郡･小城郡･神埼郡･基肄郡･養父郡･三根郡･杵島郡･藤津郡・東松浦郡・西松浦郡）が分離されて、再び佐賀県が成立しました。

こうした歴史を受け継ぎながら、明治２２年（１８８９）の市制・町村制施行などを経て、大正の大合併、昭和の大合併、平成の大合併により新「佐賀市」が誕生し、現在に至っています。

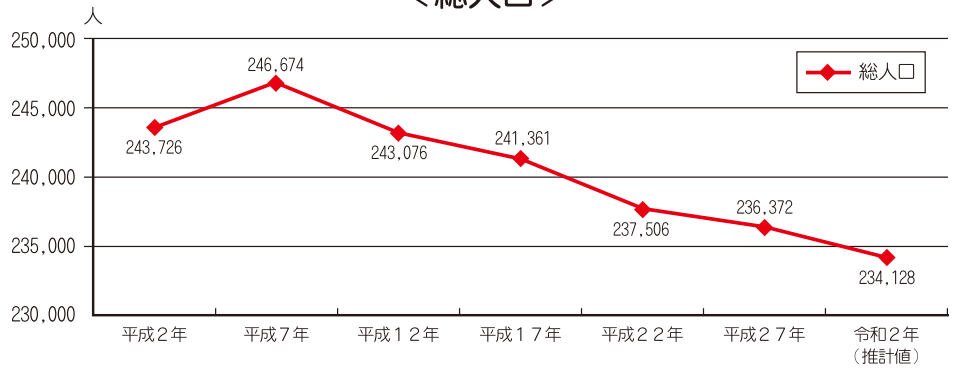
（3）人口、世帯

本市の人口は、平成７年をピークに減少に転じており、平成７年（２４６,６７４人）から令和２年（推計値）（２３４,１２８人）までの２５年間に約１２,５００人が減少する見込みとなっています。

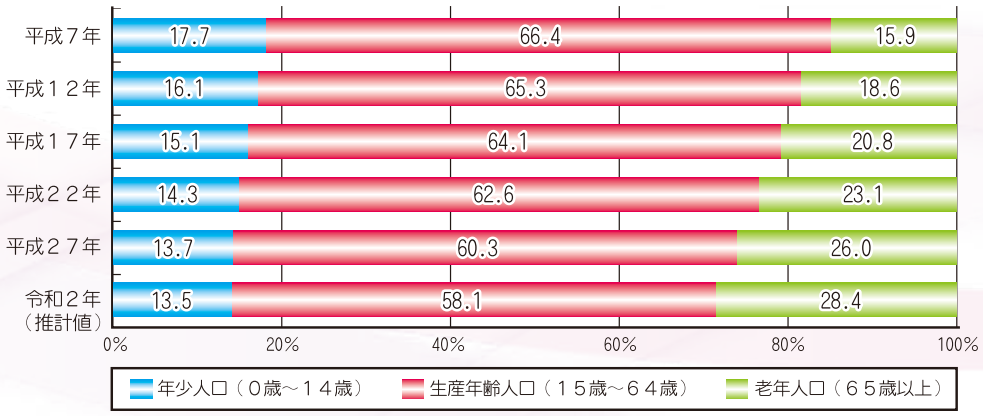
年齢３区分別人口については、年々少子高齢化が進み、令和２年（推計値）時点で老年人口（６５歳以上）が全体の２８.４％、年少人口（１５歳未満）が１３.５％となっており、少子高齢化が顕著になっています。

また、世帯数については一貫して増加し、令和２年（推計値）時点で９６,９２５世帯となっています。

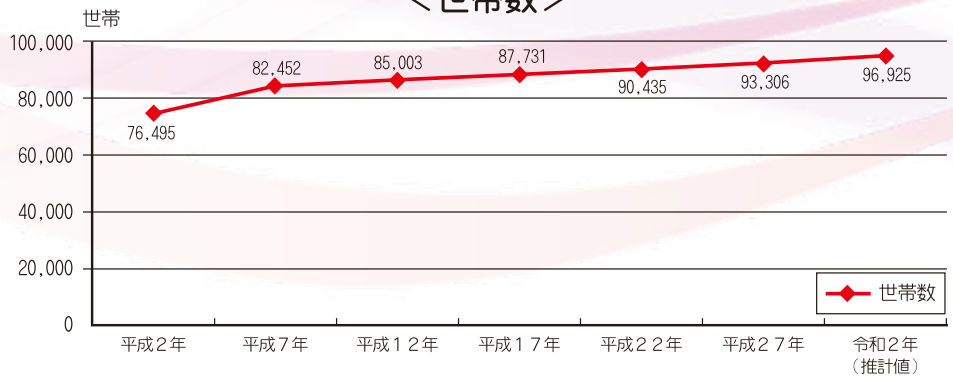
＜総人口＞



＜年齢（３区分）別人口＞



＜世帯数＞



（資料：国勢調査）